高校生の時の友人が死んだ。自殺だったらしい。らしい、というのは式の前夜に他の友人から、忘れていた、という言葉つきで電話越しに聞いただけだったからだ。

怒りはしなかったし、なぜ、とも訊かなかった。もう七年も会っていない相手だったし、仕事に疲れていて食事と睡眠と風呂以外のことを考えたくなかった。

翌朝、いつもより早い時間に目を覚ました。いつも早い時間に目覚ましを設定しているが、それよりも三十分も早い時間に目を覚ました。だらだらとするのは嫌いなのでそのまま布団から出た。空はまだ暗いかと思ったが、東の空はほのかに白んでいた。かすかなひかりで照らされた空にはくもひとつなく、今日の好天を予感する。

そういえば、晴れ男だった。

なんとなく食欲が湧かなかった。

鍋で沸かした湯で、珈琲を淹れる。いつもよりやや濃い目にした。椅子を広げ、キッチンを机代わりにして本を片手に珈琲を飲んだ。

「にが」

あまりにも濃くし過ぎたが、それでよかった。

閉じた窓を少し開けるとその隙間から空が見えた。窓辺に立って吐く息は白かった。そういえば今日は晴れるが寒くなるらしいとラジオで聞いた気がする。

そういえば栃木の冬は寒かった。気温はおそらくさほどではなかったが、とにかく風がひどかった。風が強い日はほとんど一日中そのままで、自転車よりも徒歩の方が早かった。それでも向かい風であれば苦労した。ここではそういうこともなく、快適だ。

……。……なぜ自殺したのだろうか。

「ああ……」

考えないようにしていたことをついに考えてしまった。

今日の起床時刻は高校生の時の起床時間とまったく同じだった。三年かけて目覚ましがなくとも起きれるようになってしまった、老人のような起床時刻。それは寮内規則によって定められたものだった。最初は不満しかなかったが、慣れてしまう頃には「早起きは三文の得」ということわざの意味を真に理解することとなった。

間の良い事に今日は土曜日で休日だ。明日の夜までに戻れば何も問題ない。始発の時間が十七分後に迫っていることを確かめながら着替えと荷造りを済ませた。

式がどこで行われるのかは知らないが、かつて高校生活を過ごした場所は頭につよくつよく刻みこまれている。そこへ行く、という決断をするのに迷いはなかった。

駅まで一度も立ち止まることなく駆けた。そのおかげで一分の猶予をもったまま電車に乗り込んだ。息を乱しながら車内を見る。三両しかない電車の最前の方にこちらにかまわず黙々と読書を続けるひとの姿があるだけだった。そのひとはまったくこちらを気にしなかった。

安心し、席に着いた。目をつぶれば瞼の裏にかつての友人の姿が現れた。